

刊行にあたって

私が歯科衛生士としてこの世界に入ったのは1990年、20歳のときでした。学生時代の臨地実習先であった歯科医院に、晴れて職員になることができたのです。就職したその日の午後に、患者さんにスケーリングをしました。もともとは実習生でしたから「できるよね？」という雰囲気だったのです。

新人研修はとくにありませんでした。優しくて親切な先輩はいらっしゃいましたが、なにしろ地元の人気歯科医院、毎日が押すな押すなのアポイント状況のなかで、ヒヨッコ歯科衛生士の私の面倒など、誰も見る時間がなかったのです。そんななか、理事長と院長が歯科医療の基本を細かく教えてくださったのを覚えています。

時は過ぎて、優しい先輩歯科衛生士は次々と寿退職をし、いつの間にかヒヨッコ歯科衛生士の私を取り残されました。院内の先輩から何かを教わるという経験がほとんどないままどんどん時が流れ、私は現在25年目の歯科衛生士になったのです。もちろん、講習会やセミナーなど、外に学びに出ることはたくさんしましたが、日常臨床の「どうしたらいいのかな？」という些細な疑問にアドバイスをくれる先輩が側にいてくれたらどんなに心強かったことでしょう。

ある日、こんなお話をいただきました。「医院に先輩がいない歯科衛生士のために、連載を執筆しませんか」

たいていの歯科医院は少人数の小さな会社。経験豊かな先輩がすべての歯科医院にいるわけではありません。かつての私のようなヒヨッコ歯科衛生士が、困った顔をして臨床現場に立っているのが想像できました。そうだ、先輩たちのお悩みを聞いてみよう。

こうして「教えて先輩！ ハイジニストワークお悩み相談室へようこそ」（連載時「先輩 DH に聞く！ ハイジニストワークお悩み相談室」）が生まれたのです。

本書には、筆者の私以外に“後輩”という登場人物が出てきますが、これは私の勤務する医院の後輩ではなく、読者のみなさんを想定しています。DHstyle 編集部に寄せられた読者のみなさんからのお悩みに対してお答えしているものです。そして、みなさんが先輩の立場になったときに、今度は“先輩”として、また本書を開いていただけたら幸せです。

2015年4月

青木 薫

